

校長室からこんにちは！

No. 3 1

2月25日

発行者 中田 禎二

瑠璃色

『瑠璃色の 地球も花も 宇宙の子』

『この句は、国際宇宙ステーションで働いている合間に、宇宙の姿、地球の姿を見てつくったものです。小学校の理科の授業のとき、私たちの身体は、夜空に浮かぶ星と同じ成分で出来ている、宇宙のかけらで出来ている、ということを知ったとき、なぜかじんと感動したことが思い出されました。みんな宇宙の子なんだなあ、と。地球は、宇宙に無数に存在する惑星の一つです。しかし奇跡的に美しい。青く光る水平線は、地球の生命を包んでいるようです。地球自体が活着しているようでした。そして花も人もみんなが、誰かに支えられ、助けられて活着しています。そして同時に誰かを助けているのです。』

新しい知識を得る、ということは、世界が変わることだと思います。自分も宇宙の子なんだと知ったとき、歴史上の様々な出来事を知ったとき、今まで見ていた世界が違って見えました。教育とは、そういう力を与えてくれるものだと思います。そして、それらの知識を単なる知識で終わらせるのではなく、自分の中で消化し、力に変えていくことが大事です。…教育とは子どもだけが対象ではありません。一生涯、学習の連続です。よりよい未来を残すために、まずは、大人からもう一度、身の回りの自然に目を向けてみようではありませんか。子どもは大人の背を見て育ちます。大人が謙虚に自然の前に学び続けていれば、子どももきっと、身の回りの様々なことに興味をもち、自ら学ぼうという気持ちになるのではないのでしょうか。言葉だけでなく態度で示していきたいと、思うこのごろです。』『教育の窓』2012.1 Vol. 35 (東京書籍) より

これは、2010年4月にスペースシャトル・ディスカバリー号に搭乗し、宇宙ステーションの組立ミッションに従事した、山崎直子さんの教育冊子の巻頭言の引用です。

山崎さんは他の冊子でも幼い日の自然体験の価値を述べていますが、私がこの文章を紹介した理由は3点あります。それをキーワードで表現しますと、自然体験・感動体験・学習体験です。1点目の自然体験は、人間が自然への畏敬の念を抱き、自然から真摯に学ぶことの大切さです。2点目の感動体験は、…では、私はドーハっ子にそれら感動体験をどれくらいさせているか、また意識しているかという問題意識です。3点目の学習体験は、大人も生涯学習の視点を持つこと、とりわけ、親は、教師はその後ろ姿を日々子どもに見られており、子どもはそこから学んでいることへの自覚の重要さです。

私は教職員に、しばしば、目の前の子どもの姿は己の指導の姿であると言います。それは、即、校長の指導の姿でもあり、年度の終わりをひとつのけじめとして自分を振り返り、この時、できることから改善にあたっていきたいと思います。

校長写真館



久しぶりのプール。水の感触を確かめながら、新学期につながる練習に師弟が取り組みました。

1年を通しての屋外運動ができないドーハ。でも、水泳ができるドーハ。「地域の特徴」を生かしています。

ちょっとお耳を…

子どもの前に立つと、ついつい余計なことまで話してしまう。担任していた頃は脱線の毎日であった。話す中身は家族のこと、失敗談、弱み、恥をかいたこと等。実は、ドーハに来てからもしばしばやっている。

なぜそうなるのか、もちろん、パーソナリティーがそうさせるのだが、もう一つの理由は相手が子どもだからと思う。子どもの純真な眼差しに見つめられると、心の扉が開かれる気がする。そして、一番強烈なそれは赤ちゃんだ。